

图23 3号住居跡出土遺物(2) (縮尺 1/3)

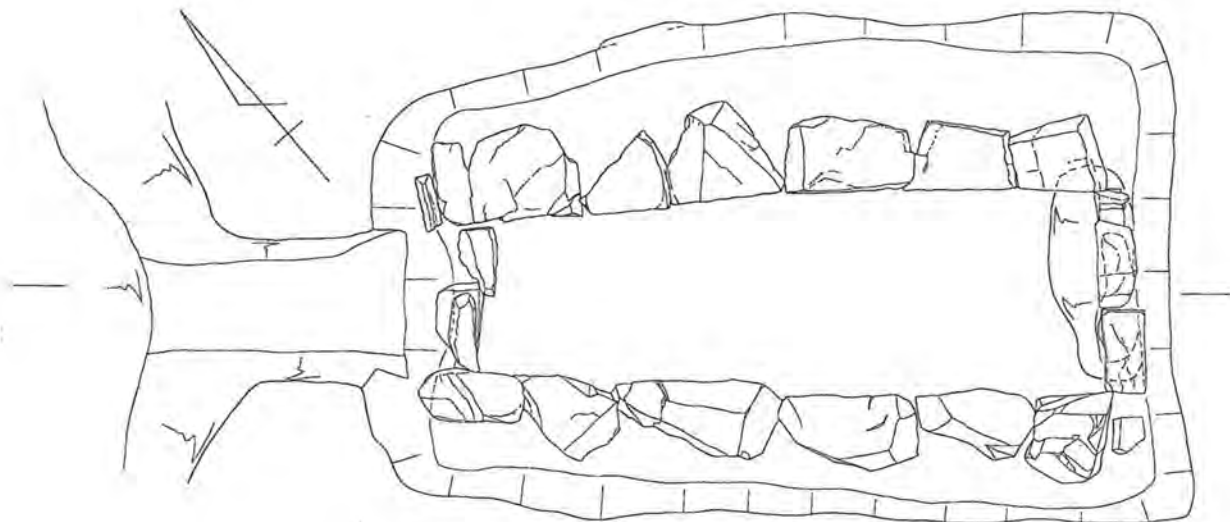
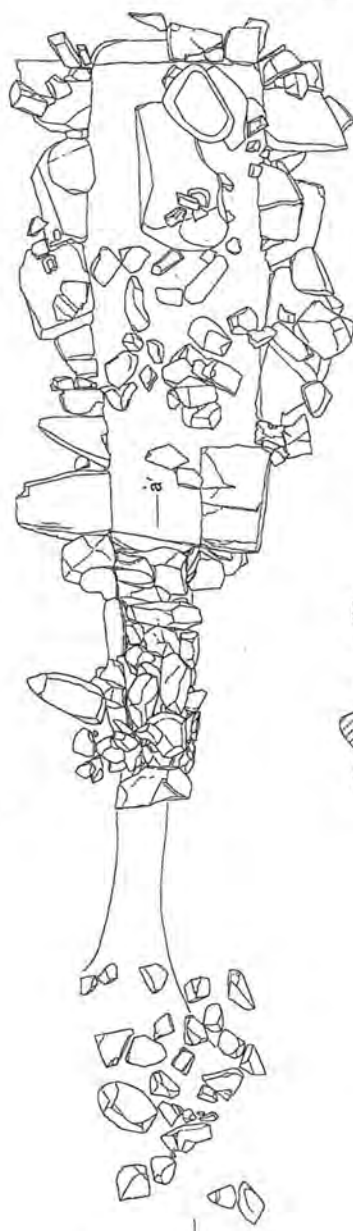
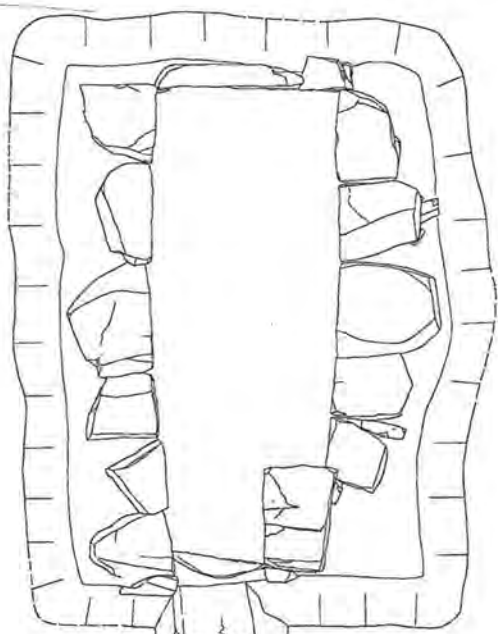
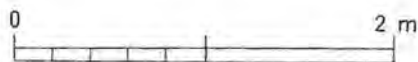


図51 吉田奥第2号墳閉塞石・根石・土壌実測図 (縮尺1/40)



1. 淡褐色 小礫多量。花こう岩片を含む。
粘性ややあり。しまり強。



a 151.00 m

図66 吉田第2号墳根石・土壌実測図・石室出土状況 (縮尺1/50)

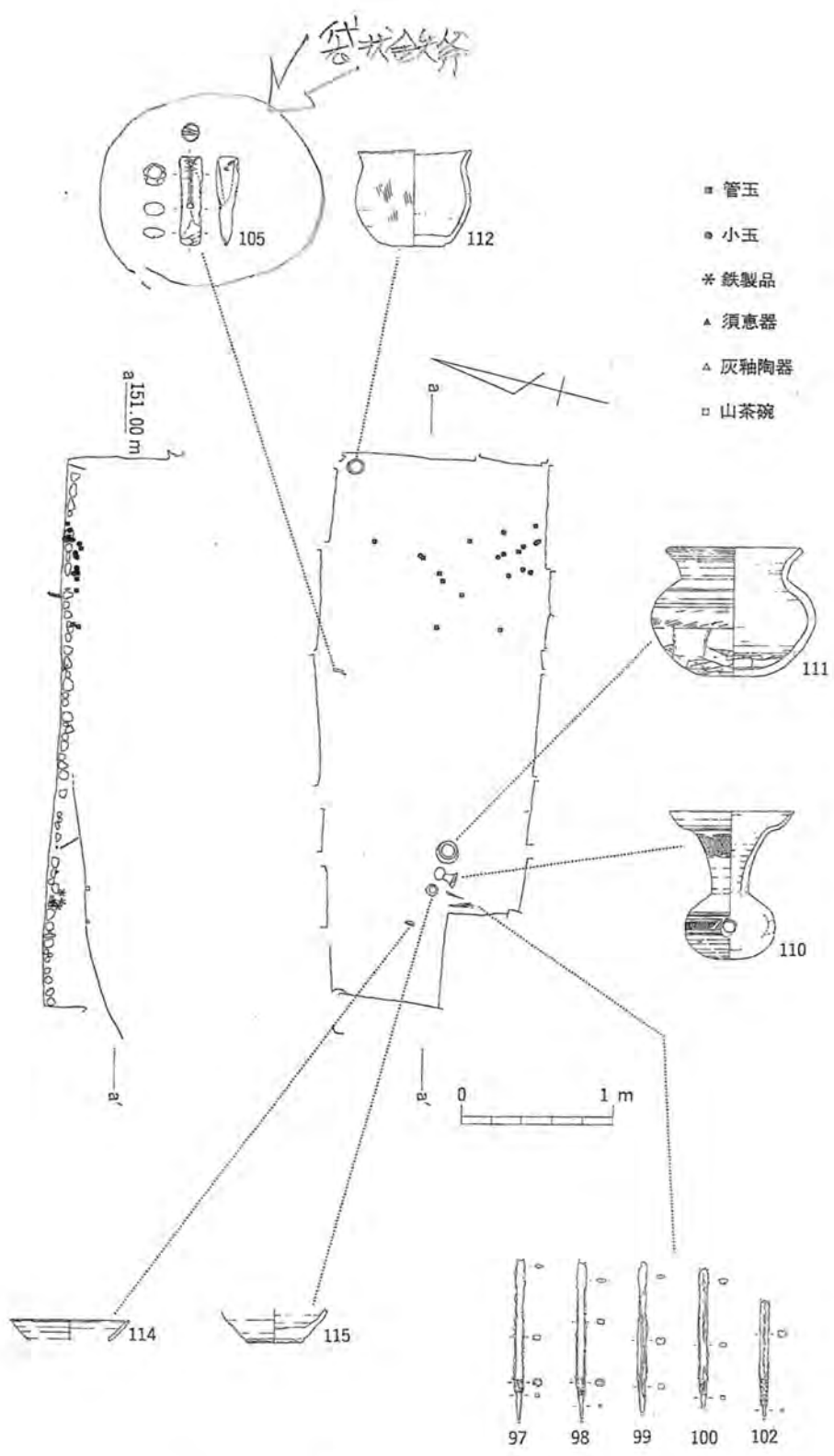


圖67 吉田第2号墳遺物出土狀況 (石室縮尺1/40)

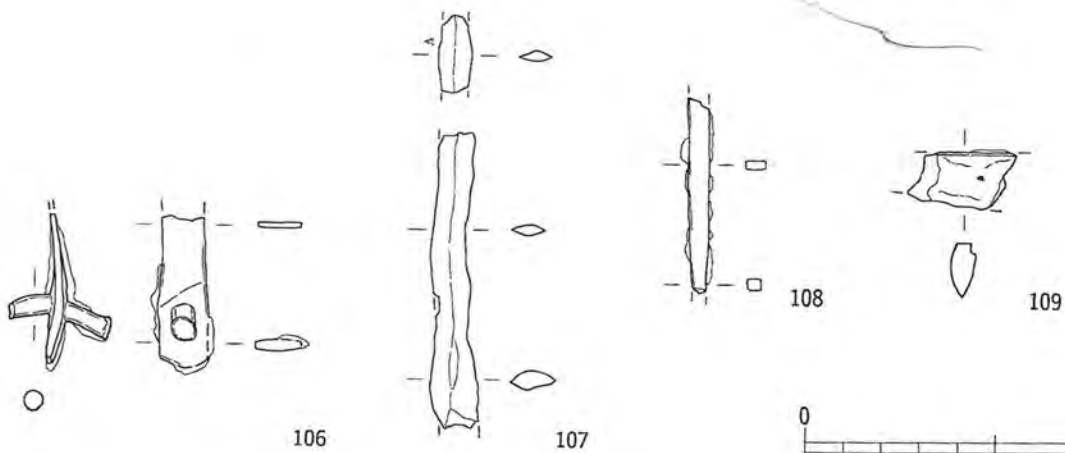
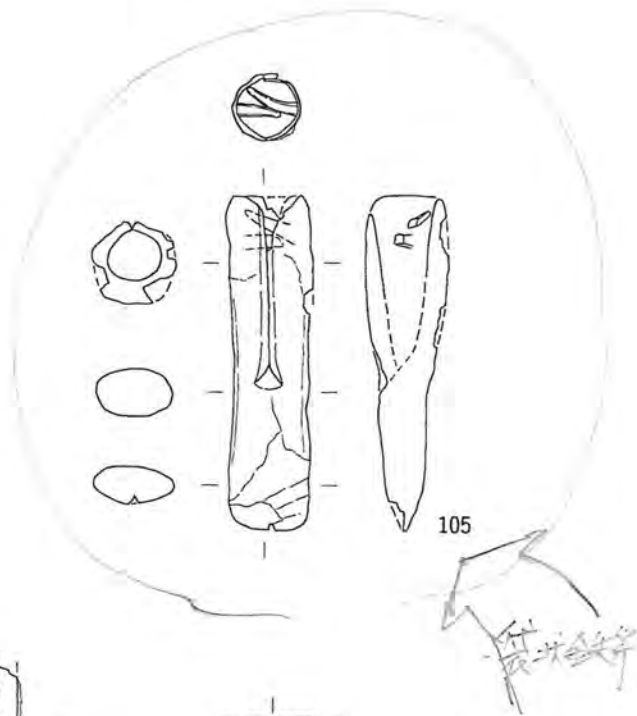
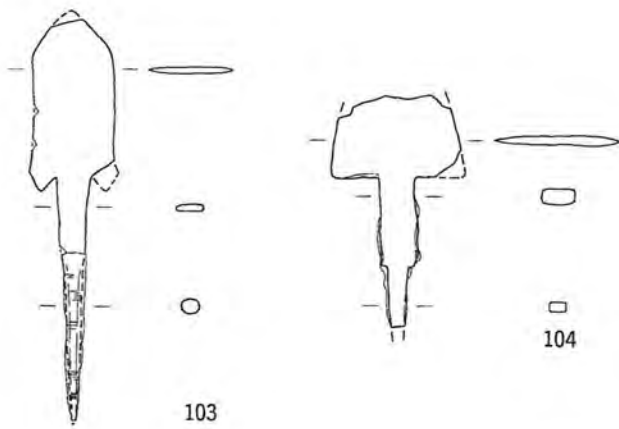
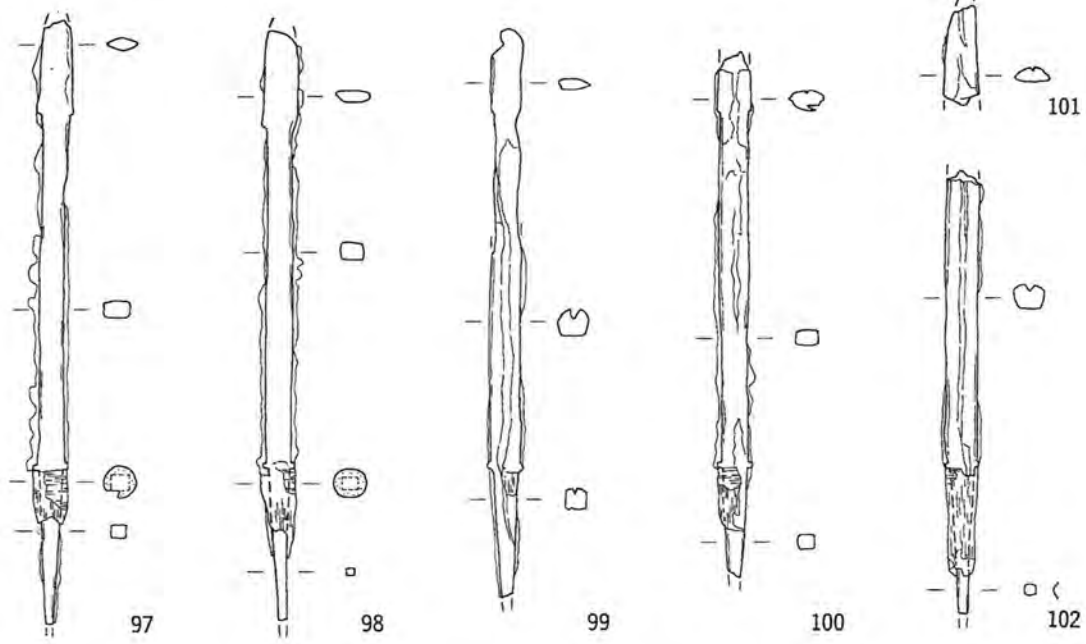


图69 吉田第2号墳出土遺物(2) (縮尺 1/2)

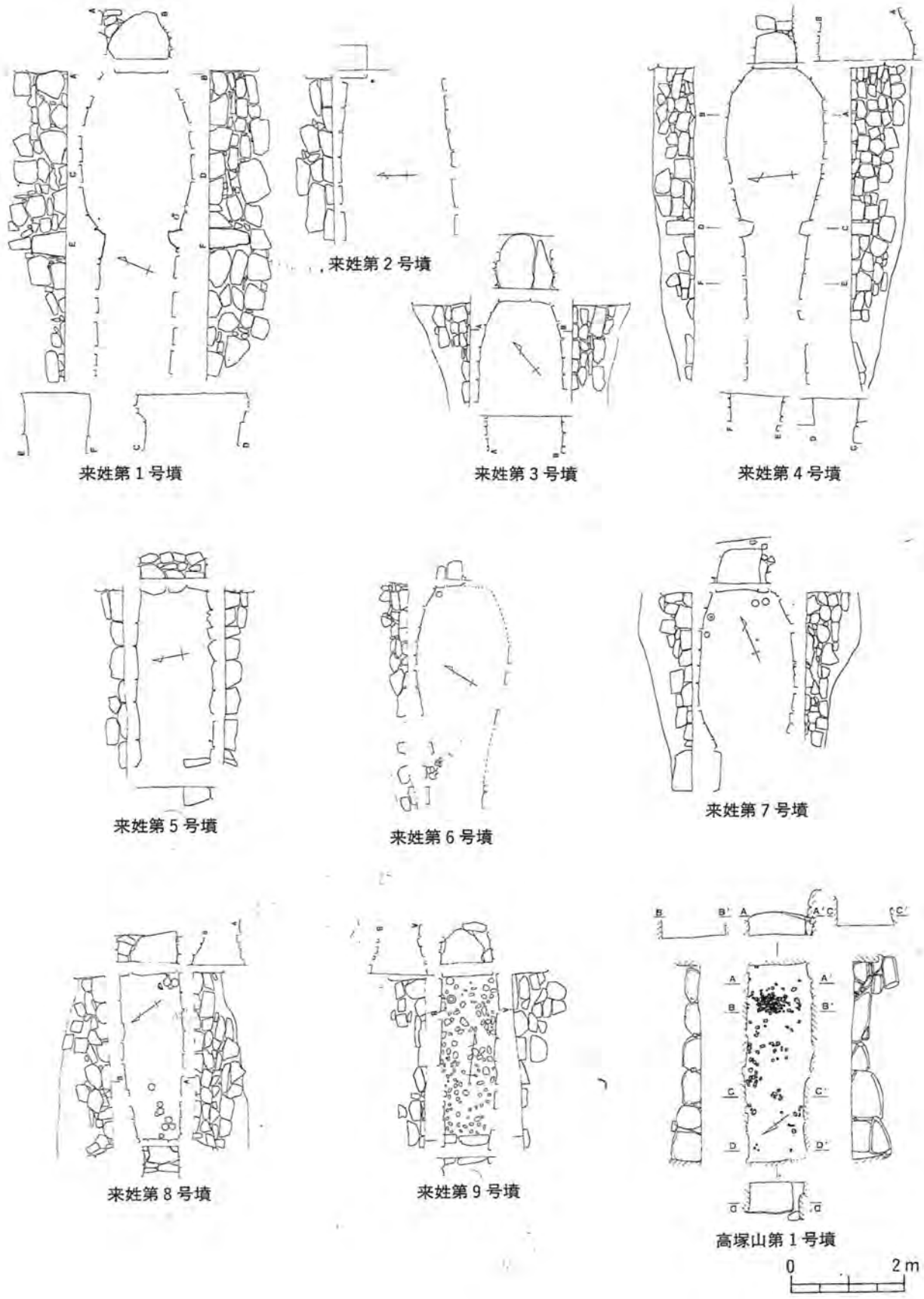
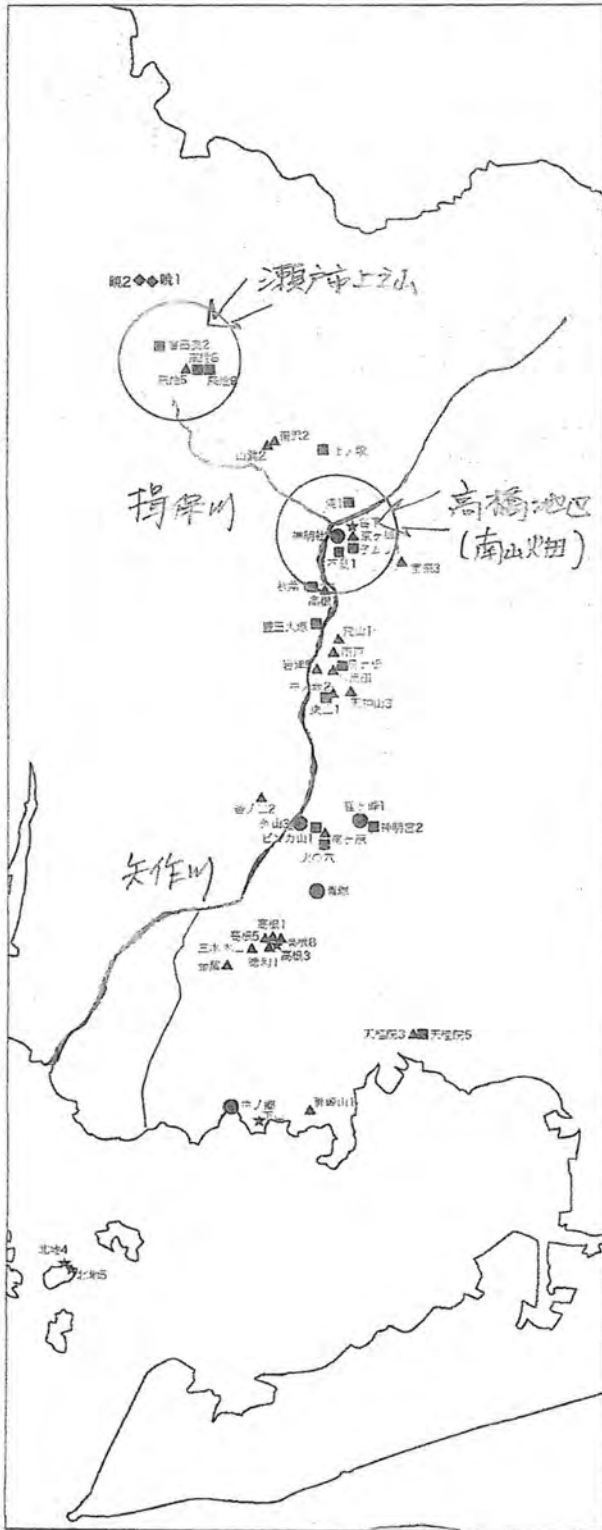


图71 吉田・吉田奥周辺の横穴式石室(1) (縮尺1/100)



- I期
- II期
- ▲ III期
- ★ IV・V期
- ◆ VI・VII期

疑似兩袖

古墳

月同張

豆粒石 (袖百)

第43図 矢作川流域周辺における竪穴系横口式石室の分布

「荒山古墳群」2004

○自分なりの整理

瀬戸市上ノ山吉田奥で確認された4C~5C代の住居址群は、当時の鉄器加工の工房群である。それらは丘陵斜面に、古墳群と併存している。それぞれの年代については住居址群(4C末~5C末)と古墳群(6C前半~7C初)とに時間差があるが、住居址が5C末でなくなった訳ではない。というのは、住居址即ち鉄器の工房は20°の角度の急斜面に平坦地を作って営まれていて、5C末の3号住居の直下は崖で崩落しているからである。住居の位置を確認すると、斜面上位に4C代の2号住居址が位置し、その下位に5C代の4号住居が位置する。双方の距離は約10m。比高差は3mであることからすれば、6C代の住居は4号住居址の下位10mの位置にあったものの崩落した可能性が大きい。6C代の住居にこだわる理由は、吉田奥2号墳(7C初頭)には当地での製作と考えられる袋状鉄斧が副葬されているからである。

この工房群と古墳群は、丘陵下の水田や集落からは隔離した非日常的な空間として眺められていたであろう。こうした景観は古墳時代には、地域の別はあるとしても一般的なものであったように思われる。特に吉備を中心とする中国地方の製鉄地域では、丘陵斜面に製鉄炉と古墳群が併存するのは一般的な景観である。恐らく下から眺める者にとっては畏怖を覚えるものであったろう。瀬戸市の山之上では、弥生末期から古墳末期までを通し、畏怖の雰囲気は漲っていたように思われる。

あくまで出土品から判断するならば、丘陵上の住居(1,2号住居は4C代)は弥生末期と結びつくかも知れない。吉田奥2号住居の周溝から出土した手鎌は、弥生末期から古墳時代にかけて北部九州を中心に使われた鉄製穂積具の一種とされる(大蔵氏解説・p85)。当時としては極めて貴重品であった手鎌が此处から出土したのは、大橋氏の指摘する通り、やはり丘陵下の吉田川小平野の稲作と関連するだろう。2号住居址では床面の焼土部位と多くの炭化材の存在が報告されている。鞆羽口も鉄滓も鉄床石もなく、「炉」とは呼べない状況ではあるが、それでも此处が一般住居と異なる性格を有していたことは、焼土に加えて手鎌の残留にある。水田面からかなり急勾配を登らねばならない場所で、床面に出土が積る住居址に極めて貴重な手鎌が存在する理由は、此处で鎌刃部の研磨が託されていたからとしか考えられない。亦、鉄滓を伴う吉田奥3号住居出土の甑と甕には、スス痕がなく煮炊きには用いられなかったとされる。これらの住居群は生活の為ではなく、鍛冶の為の特殊な作業場として、敢えて斜面に平地を作って営まれたと理解して大誤ないだろう。この状況は、集落成立期の、集落と鉄器工房の相互依存の在り方を良く伝えている様な気がする。

吉田奥3号住居(5C末)では鞆羽口と鉄滓が検出され、床面には焼土面と炉床が確認され、伸ばしや曲げ等の沸かし作業が行われた鍛錬工房として間違いない。出土した12個の椀型際を含む鉄滓は10cm幅のものもあり、何度も鉄素材が羽口前の高温に曝されたことを物語る。炉床は浅くカーボンベッドが敷かれ、村上分類のⅢ類に当たる(村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店・1998)。大澤正巳氏の鉄滓分析ではウスタイトFeOとファイヤライト2FeO・SiO₂で構成され、鉄素材は鉄鉱石起源とされる(大澤正巳「吉田奥遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上ノ山』付論)。

何を作っていたかについては、少なくとも丘陵上古墳群の鉄鎌は此处での製作であろう。それらは古墳毎に、時期差を反映して作りは微妙に異なるものの、鍛造長頸鎌として一括出来る。ただ、吉田奥2号墳の大刀は此处で作られたかは分からない。刀作りの繰返し鍛錬或いは焼入れ作業には、高温に耐え得る炉・強い鉄床・水場etcのそれなりの規模の鑪場が不可欠だが、丘陵斜面を削った狭小な平坦地には相応しくない。亦、王権が刀剣の鍛造を許したかどうかとも疑問である。鉄鎌の大半は王権へ供されたであろうが、この狭い空間で、丘陵下の農耕生活と不可分な関係が続いていた工房での鉄器生産の主眼は、やはり農具製作にあったはずである。7C初頭の吉田2号墳に副葬されていた袋状鉄斧は二本の釘で木柄に動かない様に留められていた。実際に農地の開墾作業に耐えられる仕様の鉄斧は、当地の工房の属性を雄弁に物語る。それは亦、被葬者の属性を示すものであり、吉田奥古墳群の被葬者を考える材料として重要である。

袋状鉄斧は弥生時代の主要舶鉄載品の主流であった鑄造鉄斧の流れにある。倭国では弥生時代から多量の舶載品鑄造鉄斧を苦勞して使ってきた。多くは鉄斧の破片を研磨して使用したものである。袋状鉄斧は強度と利便性に優れているが、鑄鉄の故に木柄を取り付ける袋部の折り曲げが難しい。鞆羽口の強い送風が可能となって以後、900~950°C前後の高温に鉄を沸かし、焼きならして徐々に空冷して可鍛鑄鉄化する技術が普及し、沸かし曲げや鍛接が可能になった。この可鍛鑄鉄は、既に弥生後期には北九州に伝わっていたされるものの、直ちに列島に広がることはなく、5C半以降に漸く全国的に普及する新しい技術である。この時期即ち5C後半の列島には、板状鉄斧に替わる鉄鋌や、U字型鉄鋤刃先等の利器、或いは数十cmもある長頸鎌等々、新しい鉄器が急速に出回り始めた。その動きの背景には鞆と羽口の普及がある。農耕具作成が眼目であった上ノ山の工房では、手に入れ易い鑄造鉄斧を利便性に優れた袋状鉄斧に仕立て上げ、その一つが7C初頭の吉田奥2号墳に副葬されたたと一応の理解をしておきたい。